

高等学校

令和5年度

# 教育研究員研究報告書

外国語

東京都教育委員会

## 目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	1
III	研究の仮説	2
IV	研究の方法	3
V	研究の内容	7
VI	研究の成果	10
VII	今後の課題	16

研究主題	<b>「読むこと」と「話すこと[発表]」の 統合的な言語活動を通じた指導と評価 ～個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて～</b>
------	---

## I 研究主題設定の理由

国内外の様々な分野でグローバル化が進展している中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。

小学校中学年に外国語活動、高学年に外国語科が導入されたことで、小学校から高等学校まで、学習指導要領の内容が一続きで捉えることができるようになったことから、高等学校段階の指導において、小・中学校段階で身に付けた土台となる英語力を把握することは、より効果的な指導への第一歩である。東京都では、都内公立中学校を対象に、「中学校英語スピーキングテスト (ESAT-J)」を導入し、その結果を進学する都立高等学校に提出することとなっている。このことにより、都立高等学校では、入学する生徒の「話すこと」の力を客観的に把握することが可能となっており、高等学校における指導に資することが求められている。

また、中学校3年生を対象とした「令和5年度全国学力・学習状況調査」(文部科学省)(以下「全国学力・学習状況調査」という。)からは、指導すべき領域やどのような観点でそれぞれの技能を捉えていくべきかに関するヒントを読み取ることができる。この調査において、「書くこと」「話すこと [やり取り]」の正答率がそれぞれ24.1%と14.5%であるのに対し、「話すこと [発表]」の正答率は、4.2%と低い。一方、受容能力においては、「聞くこと」の正答率が58.9%であるのに対し、「読むこと」の正答率は51.7%で、小問ごとに見ると、知識・技能を問う出題に比べて、思考・判断・表現に関わる出題において正答率が低い。このことを受け、文部科学省は指導のポイントとして、「読む目的に応じて要点を捉えた上で、内容に対する感想や賛否、自分の考えなどを話したり書いたりして表現するなど、領域を統合した言語活動を行うことが大切である。」と示している。これらの課題は、高等学校段階においても共通していると考えられることから、統合的な言語活動を通じた指導と評価を工夫することによる、「読むこと」と「話すこと [発表]」の力を育成することが課題であると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の視点

全国学力・学習状況調査によると、「(英語「話すこと」調査で) 聞いたことを理解したが、話す内容が思い浮かばなかった」と回答した生徒、「(英語「話すこと」調査で) 聞いたことを理解し、話す内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった」と回答した生徒はそれぞれ約4割であった。このことから、話し手が述べたことに対して、自分の考えをまとめたり考えた理由を整理できなかつたり、自分の考えとその理由を話すために必要な表現が身に付いていなかったりすることが考えられる。

これらを踏まえ、「話すこと [発表]」の指導を改善するため、次の3点を取り上げて研究を進めた。

- (1) 「読むこと」と「話すこと [発表]」の統合的な言語活動を通じた指導と評価を工夫する。
- (2) パフォーマンステストを含めた発表活動の音声記録から生徒の変容を観察し、個別最適な学びの実現を目指す。
- (3) 他者の意見や考えに触れる機会を与え、協働的な学びを促す。

(1)については、全国学力・学習状況調査の話すこと（大問2）において、「社会的な話題について聞き、自分の考えとその理由を話すことに課題がある」と指摘されている。高等学校においても、聞いたり読んだりした内容を理解しているにも関わらず、自分の考えをその理由と共に話すことができない生徒が多いと考えられる。このことから、「話すこと [発表]」を支えるための背景知識や言語材料を十分に得るために「読むこと」の指導を工夫することが役立つのではないかと考えた。

また、学習指導要領に基づいた指導のポイントとして、「生徒の成長やつまづきを把握して、指導に生かす」という従来の指導にICTの利活用を加えることで、「録音・録画で自分の発表等が理解できる」、「動画やプレゼンテーション、ホームページ作成等を通して英語による発信力を強化できる」といったメリットを組み合わせ、自律した英語学習者の育成を図ることの重要性が挙げられる。「令和4年度英語教育実施状況調査」（文部科学省）によると、英語の授業において「生徒による、発話や発音などを録音・録画」した学校の割合は69.6%と、前年度の同調査結果49.7%に比べて増加しているが、パフォーマンステストを含めた発表活動との組合せに、更なる活用の余地があると考え、(2)を設定し、個別最適な学びと評価の可能性を追究できると考えた。

(3)については、高等学校学習指導要領外国語に、内容の取扱いに当たって配慮する事項として「生徒が発話する機会を増やすとともに、他者と協働する力を育成するため、ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について適宜工夫すること。」と示されている。これまでの指導においても、協働することで、使用する語彙や表現について、工夫したり深めたりするポイントを見いだす生徒の姿が多く観察され、効果が期待できることから設定した。

### Ⅲ 研究の仮説

本文の概要や要点を捉える「読むこと」の指導の工夫により、文章の内容理解を深めた上で、生徒の意見を引き出す「話すこと [発表]」の活動を取り入れることで、自分の意見を論理的に話すことができるようになる。

論理的に自分の意見を話すためには、題材について理解していることが前提となる。また、生徒の英語力や状況に応じて、一人一人が自分の意見を述べる際に使用する語彙や表現を自ら学ぶことができる。そこで「読むこと」で題材への理解を深めてから「話すこと [発表]」の活動へと発展させる指導手順を踏めば、統合的な言語活動に取り組みながら、両領域の力の更なる育成を目指すことができると考えた。

本研究では、統合的な言語活動を通じた指導と評価に焦点を当て、協働的な活動を取り入れることで授業改善を行った。また、録音した発話を分析することで、「話すこと [発表]」に係る資質・能力の変容を見取った。

## IV 研究の方法

### 1 本文の概要や要点を捉えさせる指導・活動の工夫

英語コミュニケーションⅠの「読むこと」の領域の目標「イ」には、「社会的な話題について、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができるようにする。」と示されている。このことから、本研究では、理解が難しいと思われる語彙や表現を、簡単な表現や既習の表現に言い換えたり、取り上げた話題の背景について説明したりするなどの支援を行った上で生徒が文章の概要や要点を正しく捉え、その後に行う自分の考えを発信する活動を生かすことができるよう指導することを目指した。「概要とは、読んだ英語のおおよその内容や全体的な流れのこと」、また、「要点とは、書き手が伝えたい主な考えなどの読み落としはならない重要なポイントのこと」である（高等学校学習指導要領解説外国語編英語編）。本研究では、概要と要点を読み取るために必要な情報を捉えるための「読むこと」の指導や活動の工夫として、次のような取組を生徒の実態に応じて取り入れた。

- ペア・ワーク及びグループ・ワーク
- <sup>1</sup>ジグソーリーディング
- <sup>2</sup>グラフィック・オーガナイザー
- ノートテイキング
- 発問や指示の工夫

### 2 生徒の意見を引き出すための指導・活動の工夫

英語コミュニケーションⅠの「話すこと [発表]」の領域の目標「イ」には、「社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができるようにする。」と示されている。「使用する語句や文、事前の準備などにおいて」生徒が支援を活用する場面として、次のようなものが考えられる（高等学校学習指導要領解説外国語編英語編）。

- 発表準備（話し合い）
- 発表準備（メモ）

<sup>1</sup> 使用するテキストを複数のパートで分割し、グループの協働学習によって課題解決を図る学習法

<sup>2</sup> テキストや知識構造を視覚的に図示したもの

- 発表時の補助（視覚資料）
- 発表形態の工夫

これらを生徒の実態に即して、必要な段階を踏んだり、必要な時間をかけたりして取り組むようにした。最終発表形態についても、大人数に対して行うスピーチのみに限定せず、各校の状況に応じて、ペアやグループ内で伝え合うことも可能とした。また、論理に矛盾や飛躍がない状態を生徒が意識できるよう、理由や根拠を明らかにすることを課題の条件に組み込む工夫を行った例もある。共通理解として、発表活動を設定することとし、事前に書いた原稿を読み上げることに終始しないように留意した。これらのことを踏まえ、生徒の意見を引き出し「話すこと [発表]」の力を伸ばす指導や活動の工夫として、次のような取組を、生徒の実態に応じて取り入れた。

- ペア・ワーク及びグループ・ワーク
- フレームやモデル、選択肢の提示
- <sup>3</sup>ピア・インストラクション法
- 発問や指示の工夫
- 関連英文の挿入

### 3 ICT機器の利活用

一人1台端末の取組が始まり、高等学校において個人端末の活用は日常的になりつつある。英語教育においても、生徒同士の主体的・対話的な学びやオンラインによる海外の学校との協働プログラム、また、学習ログを活用したエビデンスベースの指導を行ったり、ビックデータの活用・分析により授業改善を図ったりする取組が可能となっている。

「GIGAスクール構想のもとでの高等学校外国語科の指導についての参考資料」（文部科学省 令和3年6月）によれば、ICT機器を活用する際のポイントとして、「やり取りや発表のモデル動画を共有フォルダに保存し、語彙や表現、話し方などを主体的に学ぶ機会の提供」や、「ブレインストームや英文作成などをICT端末を使って個別で行ったり協働で行ったりして、対話的に学ぶ機会の提供」及び「パフォーマンステスト等評価への活用」が挙げられている。

本研究で取り上げる領域の一つである「話すこと [発表]」の言語活動と一人1台端末の活用は親和性が高く、個別最適な学びを促す一助となるのではないかと考えた。また、授業内外の言語活動においてICT機器を用いて発話を記録することで、主体的・対話的で深い学びの実現とパフォーマンス評価への可能性を模索した。

---

<sup>3</sup> 生徒自身が考え、議論し、学び合う機会を提供するため、生徒同士の対話や協力を促す手法

#### 4 検証方法

##### (1) 生徒の意識の変容

今回の学習活動を踏まえて、英語を「話すこと [発表]」などに関する生徒の意識の変容を、検証授業の前後に実施する質問紙調査結果から見取り、分析した（以下、検証授業前の調査を「Preテスト」、検証授業後の調査を「Postテスト」という）。

回答は、4段階の順序尺度を用い、次の質問をした。

Preテスト

[質問] 自分の考えを理由と共に英語で話すことに苦手意識がありますか。

Postテスト

[質問1] 自分の考えを理由と共に英語で話すことに苦手意識が軽減したように感じますか。

[質問2] 英文の内容理解を基に自分の意見を発表することができたと思いますか。

[質問3] 授業で実施した活動のうち、内容理解のために次の事柄は役立ちましたか。

A 「図や表」

B 「内容に関する質問や問題に取り組んだこと」

C 「要約の作成」

D 「リテリング」

E 「ペアやグループの活動」

F 「自分の意見を書いたり話したりすること」

[質問4] 授業で実施した活動のうち、自分の意見を話すために次の事柄は役立ちましたか。

a 「発表の型の提示」

b 「モデルの提示」

c 「トピックの選択肢」

d 「要約の作成」

e 「スピーチメモの作成」

f 「ペアやグループの活動」

g 「録音」

※項目は実際に行ったものを提示

##### (2) 発話記録による活動前後の変容

活動前後に録音した発話を聞き、個々の生徒の変容を見取り、分析し、適切な評価に活用するための情報を得て分析した（以下、活動前の録音を「Take 1」、活動後の録音を「Take 2」という）。

## 研究構想図

### 共通研究テーマ

「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」

### 高等学校部会テーマ

「全ての生徒の資質・能力を育成する、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた授業改善と学習評価の充実」

### 各教科等における「資質・能力」について

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、話し手や書き手が伝えようとしている情報や考えなどの概要や要点、詳細、意図などを外国語で明確に理解したり、理解したことを活用して、外国語で適切に表現したり伝え合ったりすることができる力

### 高等学校部会テーマにおける現状と課題

#### 【現状】

- ・ 聞いたり読んだりした内容を理解しているにもかかわらず、自分の考えをその理由と共に話すことができない生徒が多い(令和5年度「全国学力・学習状況調査」(文部科学省))。
- ・ 英語の授業においてICT機器を活用して「生徒による発話や発音などを録音・録画」した学校の割合は高いが、パフォーマンステストの実施率は低い(令和4年度「英語教育実施状況調査」(文部科学省))。

#### 【課題】

- ・ 聞いたり読んだりした内容の理解を深め、理解したことを基に自分が考えたことや考えた理由をまとめたり、自分の考えとその理由を話すために必要な表現を身に付けたりするために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組む必要がある。
- ・ ICT機器を活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現とパフォーマンス評価の実施による評価の充実を図る必要がある。

### 高等学校外国語部会主題

「読むこと」と「話すこと [発表]」の統合的な言語活動を通じた指導と評価  
～個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて～

### 仮説

本文の概要や要点を捉える「読むこと」の指導の工夫により、文章の内容理解を深めた上で、生徒の意見を引き出す「話すこと [発表]」の活動を取り入れることで、自分の意見を論理的に話すことができるようになる。

### 研究方法

#### 【具体的方策】

- ・ 本文の概要や要点を捉えさせる指導・活動の工夫を行う。  
(個別最適な学びや協働的な学びの活動例：ジグソーリーディング、グラフィック・オーガナイザーやノートテイキングなどを基にしたペア・ワーク及びグループ・ワーク、発問や指示の工夫など)
- ・ 生徒の意見を引き出す指導・活動の工夫を行う。  
(個別最適な学びや協働的な学びの活動例：フレームやモデル、選択肢の提示、ピア・インストラクション法、発問や指示の工夫、関連英文の挿入、発話の記録とその振り返りなど)
- ・ 発表時にICT機器を活用して録音させる。

#### 【検証方法】

- ・ 指導前後の質問紙の記述から、生徒の意識の変容を見取り分析する。
- ・ 発話記録で活動前後の変容を見取り分析する。



## V 研究の内容

### 1 本文の概要や要点を捉え、生徒の意見を引き出すための授業実践

本研究では令和5年9月から10月末にかけ、都立高等学校5校6名の教員が教科書等の題材を基にした検証授業を行った。使用教材及び実施した方策は、次のとおりである。

検証授業	使用教材名	実施した方策（下表参照）
検証A	<i>CBS NewsBreak 3</i> Unit 5 “Cat Library” Offers Perfect Solutions to Stress	A、B、C、D、E a、b、c、d、g
検証B	<i>Cutting Edge Green</i> Chapter 9 生活賃金	A、B、C、D、E b、c、e、f、g
検証C	<i>ENRICH LEARNING English Communication II</i> Unit 8 How do people’s personalities affect their behavior?	A、B、C、D、E、F d、e、f、g
検証D	<i>CREATIVE English Communication I</i> Lesson 6 Messages about Happiness from Hose Mujica	A、B、E、F e、f、g
検証E	<i>NEW ONE WORLD Communication III Revised Edition</i> Lesson 4 The Most Beautiful Voice in the world	A、B、C、D、E a、e、f、g
検証F	<i>WORLD TREK English Communication III New Edition</i> Lesson 3 The History of the Croissant	A、B、C、D、E、F a、b、c、d、e、f、g

実施した方策

内容理解のための方策	自分の意見を話すための方策
A 「図や表」 B 「内容に関する質問や問題に取り組んだこと」 C 「要約の作成」 D 「リテリング」 E 「ペアやグループの活動」 F 「自分の意見を書いたり話したりすること」	a 「発表の型の提示」 b 「モデルの提示」 c 「トピックの選択肢」 d 「要約の作成」 e 「スピーチメモの作成」 f 「ペアやグループの活動」 g 「録音」

### 2 質問紙調査実施の手続き

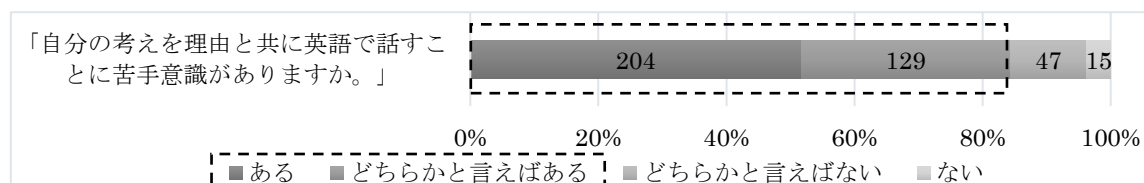
「検証方法」にあるとおり、検証授業の前後に教員6名が質問紙調査を2回にわたり実施した。

有効被験者数：395名（内訳 1学年110名、2学年111名、3学年174名）

### 3 質問紙調査の結果

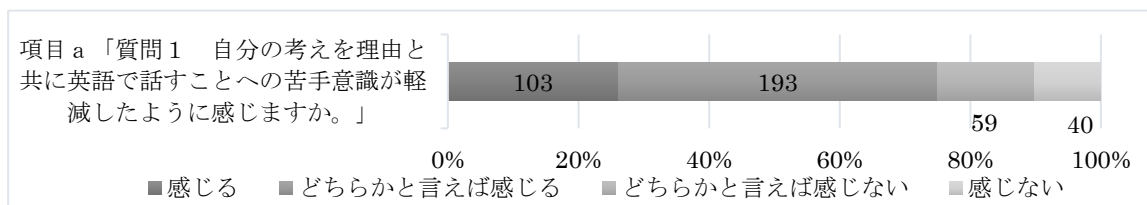
#### (1) 検証授業の成果を問う項目の結果

Pre テストにおいて、「自分の考えを理由と共に英語で話すことに苦手意識がありますか。」という質問について、大部分の生徒が「自分の考えを理由と共に英語で話すことに苦手意識」をもっているということが確認された（中央値4、平均値3.32、標準偏差（以下「SD」という。）（SD=0.82））。

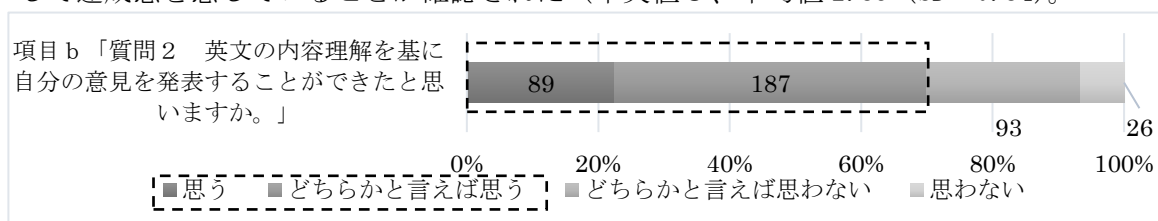


また、Post テストにおいて検証授業の成果を確認するための項目として、次の項目 a 及び項目 b について質問した。

項目 a 「質問 1 (読むことと組み合わせて話すことを学ぶ授業で) 自分の考えを理由と共に英語で話すことへの苦手意識が軽減したように感じますか。」については、多くの生徒が検証授業によって、自分の意見を理由と共に英語で話すことへの苦手意識が軽減したように感じていることが分かった (中央値 3、平均値 2.90 (SD=0.89))。



項目 b 「質問 2 英文の内容理解を基に自分の意見を発表することができたと思いますか。」については、多くの生徒が「英文の内容理解を基に自分の意見を発表すること」に対して達成感を感じていることが確認された (中央値 3、平均値 2.85 (SD=0.84))。



なお、Pre テストでの項目「自分の考えを理由と共に英語で話すことに苦手意識がありますか。」で問われた苦手意識の有無が、今回の検証授業での項目 a (苦手意識の軽減)、項目 b (意見が言えたという達成感を感じたか) に影響を与えた因子となり得るかをクロス解析で検証した。その結果、統計的有意差は見られなかった。これは、Pre テストにおいて英語で意見を話すことに「苦手意識を感じる」と回答した生徒も「苦手意識を感じない」と回答した生徒も等しく、検証授業において苦手意識を軽減させ、達成感を得ることができたということを示唆している。

## (2) 検証授業で扱った方策の有効性の検証

Post テストにおいて、検証授業で取り入れた方策について、そのねらいごとに 4 段階 (4 「役立った」、3 「まあまあ役だった」、2 「あまり役に立たなかった」、1 「役に立たなかった」) で回答する調査を実施した。各質問に対する基礎統計の結果は、次のとおりである。

本文の概要や要点を捉えさせる方策	A 図や表	B 内容に関する質問や問題に取り組んだこと	C 要約の作成	D リテリング	E ペアやグループの活動	F 自分の意見を書いたり話したりすること
平均	3.30	3.47	3.43	3.27	3.38	3.39
標準誤差	0.04	0.03	0.04	0.05	0.04	0.04
中央値(メジアン)	3	4	4	3	4	4
最頻値(モード)	4	4	4	4	4	4
標準偏差	0.75	0.67	0.71	0.82	0.75	0.73
分散	0.56	0.45	0.50	0.68	0.56	0.54
データの個数	395	395	322	322	393	290

生徒の意見を引き出すための方策	a 発表の型の提示	b モデルの提示	c トピックの選択肢	d 要約の作成	e スピーチメモの作成	f ペアやグループの活動	g 録音
平均	3.21	3.38	3.31	3.31	3.34	3.38	3.05
標準誤差	0.06	0.07	0.05	0.05	0.04	0.04	0.04
中央値(メジアン)	3	3	3	3	3	4	3
最頻値(モード)	3	4	3	4	4	4	3
標準偏差	0.79	0.67	0.63	0.74	0.72	0.77	0.87
分散	0.63	0.44	0.40	0.55	0.52	0.59	0.75
データの個数	174	79	152	226	389	389	389

サンプルの中央値が上方に偏り、正規分布に基づかないことなどから、2群間のクロス分析を行った。クロス分析では、分類において、全体的に英文の内容理解を基に「自分の意見を発表することができたと感じた」生徒群と「自分の意見を発表することができなかったと感じた」生徒群、またそれぞれの方策が「役立った」と感じた生徒群（上記の表では「4」又は「3」で記載）と「役立たなかった」と感じた生徒群（上記の表で「2」又は「1」で記載）を使用した。その上で「自分の意見を発表することができたと感じた」生徒群と「自分の意見を発表することができなかったと感じた」生徒群の回答の間の差を、<sup>4</sup>カイ二乗検定（以下、「 $\chi$ 二乗検定」という。）を用い検査した。また  $\chi$  二乗検定については  $x^2/n$  の平方根で定義される<sup>5</sup>クラメールの連関関数（以下「Cramer's V」という。）も用い、その関連性の強さを併せて確認した。なお、その際の有意水準は5%に設定した。

(3) 「本文の概要や要点を捉える指導を工夫することで内容理解が深まる」に対する結果

本研究では本文の概要や要点を捉える指導の工夫として、方策A「図や表（グラフィック・オーガナイザー）」、方策B「内容に関する質問や問題への取組」、方策C「要約の作成」、方策D「リテリング」、方策E「ペアやグループの活動（ジグソーリーディング含む）」、方策F「自分の意見を書いたり、話したりすること」を行い、それぞれ、「意見を発表することができたと感じた」生徒群と「意見を発表することができなかったと感じた」生徒群の間に統計的に有意な差が生じたのか  $\chi$  二乗検定で検出した。その結果、方策A（ $p<0.01$ , Cramer's V=0.18）、方策C（ $p<0.01$ , Cramer's V=0.16）及び方策D（ $p<0.01$ , Cramer's V=0.21）において有意な差が双方で確認された。

**手法と達成感(意見を発表できた)の間に関連性が確認された方策**

方策A「図や表（グラフィック・オーガナイザー）」、  
方策C「要約の作成」、方策D「リテリング」

(4) 「生徒の意見を引き出す活動を取り入れることで、自分の意見を論理的に話すことができるようになる」に対する結果

本研究では生徒の意見を引き出す活動を取り入れる指導の工夫として、方策 a「発表の型の提示（フレームの提示）」、方策 b「モデルの提示」、方策 c「トピックの選択肢」、方策 d「要約の作成」、方策 e「スピーチメモの作成」、方策 f「ペアやグループの活動」及び方策 g「録音」を行い、それぞれ「意見を発表することができたと感じた」生徒群と「意見を発表することができなかったと感じた」生徒群の間に統計的に有意な差が生じたのかを  $\chi$  二乗検定で検出した。その結果、方策 c（ $p<0.01$ , Cramer's V=0.24）及び方策 d（ $p<0.01$ , Cramer's V=0.22）において有意な差が双方で確認された。

**手法と達成感(意見を発表できた)の間に関連性が確認された方策**

方策 c「トピックの選択肢」、方策 d「要約の作成」

<sup>4</sup> 2つのカテゴリ変数間に有意な関連があるかどうかを判断するための統計検定

<sup>5</sup> 2つのカテゴリ変数間の関係の強さ（効果量）を理解するために使用される指標

## VI 研究の成果

### 1 「読むこと」と「話すこと [発表]」の統合的な言語活動に関する仮説検証

仮説で提示した「本文の概要や要点を捉える指導を工夫することで内容理解が深まる」については「方策A「図や表（グラフィック・オーガナイザー）」、方策C「要約の作成」及び方策D「リテリング」において有意差が見られ、主体的・対話的な活動を通して概要や要点を捉え、読みを深めることが、論理的に「話すこと[発表]」につながっている、と生徒が実感できていることが確認された。「生徒の意見を引き出す活動を取り入れることで、自分の意見を論理的に話すことができるようになる」についても、方策c「トピックの選択肢」、方策d「要約の作成」で有意差が見られ、特に「要約」が生徒の意見構築、発表における達成感の大きさに関わることが分かった。このことから、「話すこと [発表]」において「読むこと」との統合的な言語活動を授業で行うことの意義が確認された。

さらに、質問紙の結果のみを読み取る限り、生徒の意見を引き出すために有効であった方策の数よりも、読みを深めるために有効であった方策の数が多く、「話すこと[発表]」を最終目標とした単元において、目的に応じた読み方を指導することの重要性が示された。

### 2 生徒の発話記録における仮説検証

本項では授業実施者6名が都立高等学校5校で行った授業実践について、質問紙調査の裏付けとなるような生徒の発話、また統計的な有意差は出なかったものの、今回の検証授業を経て着目すべき生徒の発話を取り上げその効果を検証する。

なお、発話記録は生徒の発話をそのまま文字化したものであり、分析は同一人物のTake1とTake2を用いた。

#### (1) 有意差が確認された方策についての検証

ア 事例1 生活賃金についての意見を問う検証授業での発話（検証B）（方策c「トピックの選択肢」）

#### (ア) 検証Bの指導手順

全2時間で単元を扱い、次の活動を行った。

第1時	第2時
<ul style="list-style-type: none"><li>・黙読（通し読み）</li><li>・概要確認</li><li>・スピーチ録音（Take1）</li><li>・口頭での英問英答による内容確認</li><li>・音読</li><li>・リテリング</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・本文内容の復習</li><li>・賛成および反対意見の整理 ＜キーワードの提示＞ ＝トピックの選択肢（方策c）</li><li>・ペア・ワーク</li><li>・スピーチ録音（Take2）</li></ul>

第2時に、生活賃金に関する様々な意見を引き出し、次の表1のように、賛成・反対の理由となるキーワードをスライドに示しながら整理した。その後、“My thoughts on the idea of a living wage”というテーマで1分間のスピーチを録音した。

(表 1)

Pros	Cons
Better life / More spending Less help needed / Happier workers	More expensive stuff / Businesses might leave Fewer jobs / No reason to learn more

(イ) 発話分析 (太字下線部は、変容の見られた箇所)

Take 1

I think minimum wage and living wage ...I think a living wage is good idea because if I can't get enough money even if I work hard then I think I feel very sad so...

Take 2

I disagree with changing from minimum wage to living wage because I think **starting business became more difficult than now**. Because they have to pay more money than now, therefore our favorite stores may be lost. Also I think people **who is lazy increase because they can get enough money even if they are lazy**.

(ウ) 方策 c 「トピックの選択肢」についての検証

Take 1 では漠然と生活賃金が良いということを発言していたが、理由を整理した際に出てきた具体例やキーワードを加えて、自分の意見だけでなく、それを支える理由を具体的に提示しようと努めていることが分かる。

イ 事例 2 クロワッサンの起源についての意見を問う検証授業での発話 (検証 F) (方策 c 「トピックの選択肢」及び方策 d 「要約の作成」)

(ア) 検証 F の指導手順

全 4 時間で単元を扱い、次の活動を行った。

第 1 時	第 2 時	第 3 時	第 4 時
<ul style="list-style-type: none"> <li>・新出単語導入</li> <li>・速読 (通し読み)</li> <li>・概要確認</li> <li>・要約作成 (方策 d)</li> </ul> 後、スピーチ録音 (Take 1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クロワッサンの起源に関する 2 つの仮説 (Part1, 2) の概要確認 (方策 c)</li> <li>・ジグソーリーディング</li> <li>・精読 (部分和訳)</li> <li>・要約作成による内容確認 (方策 d)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クロワッサンの起源に関する 2 つの仮説 (Part3, 4) の概要確認 (方策 c)</li> <li>・ジグソーリーディング</li> <li>・精読 (部分和訳)</li> <li>・要約作成による内容確認 (方策 d)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リテリング (ペア発表)</li> <li>・リテリング録音</li> <li>・意見構築のための関連英文読解</li> <li>・スピーチ録音 (Take 2)</li> </ul>

第 2 時及び第 3 時の、クロワッサンの起源についての 4 個の学説の理解はペアで活動した。また、第 4 時に、リテリングテストを実施し、読みを深めた上で“The origin of croissant I believe”というテーマで録音を行った。

(イ) 発話分析 (太字下線部は、変容の見られた箇所)

Take 1

My favorite story is **third**. That's because I like history. Mary Antoinette is famous people, person in the history. So I'd like to hear the Mary Antoinette name.

Thank you.

Take 2

The most interesting story is **first**. It's because I'm interested in mythology. So **I was attracted to the sentence about "This was an offering to the moon goddess"**.

That's why my favorite story is the first. Thank you for listening.

(ウ) 方策 c 「トピックの選択肢」についての検証

Take 2 録音の際、この生徒は選択するストーリーを変更して話をしている。これについて、「話しやすい話を選べたので、話す内容がすぐに思い付いた」と記述している。生徒が意見を話す際に、話しやすいトピックを選べるような質問の設定を行ったことが生徒の発話を容易にしたと考えられる。

(エ) 方策 d 「要約の作成」についての検証

Take 2 において、この生徒は教科書の文章を引用して理由付けをしている。この引用部分は要約の作成の授業において大多数が要点として引用文章の中に使用した文章であった。要約することで心に残った部分を即興で根拠として使用することができたと考えられる。

(2) 有意さが確認されなかった方策についての検証

ここでは質問紙調査では有意さが確認されなかったものの、検証授業において有効性があったと感じられる方策に対する事例を挙げ、質的に検証していく。

ア 事例 1 人生にとって大切なものについての意見を問う検証授業での発話 (検証 E) (方策 a 「発表の型の提示」)

(ア) 検証 E の指導手順

全 7 時間で単元を扱い、次の活動を行った。

第 1 ～ 6 時 (パートごと)	第 7 時
<ul style="list-style-type: none"><li>• Oral introduction</li><li>• Reading</li><li>• 概要把握 (英問英答)</li><li>• 音読</li><li>• 精読 (部分和訳)</li><li>• 振り返り</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>• Review</li><li>• スピーチ録音 (Take 1)</li><li>• 本文内容復習① (英問英答)</li><li>• 本文内容復習② (グラフィック・オーガナイザー)</li><li>• 発表の型の提示 (方策 a)</li><li>• スピーチ録音 (Take 2)</li><li>• 振り返り</li></ul>

第 7 時に、英問英答やグラフィック・オーガナイザーを活用して本文の概要や要点を復習した後に、発表の型を提示した上で「人生にとって大切なもの」というテーマで発表 (録音) した。



in order to be successful in business?” について自分の考えを1分間で述べさせた。第2時に、Top Business Skills for Success on the Job というランキングを提示し、ディスカッションを通して Communication, Negotiation, Leadership 等が上位に入っていることを確認した。また、“Is being introverted or extroverted a diversity and inclusion issue in the workplace?” というタイトルの関連英文(ビジネスにおける多様性について)を読み、概要を確認した。

(イ) 発話分析 (太字下線部は、変容の見られた箇所)

Take 1

I think introverts should improve their extraversion in order to be successful in business because in business even though the introverts thinks a lot of things or things ...ah...came up with a lot of ideas, because they don't have a brave to express their opinion in front of the others, they sometimes can't be...can't be valued, evaluate from, by the other people, so I think they... at least they should improve their speaking skills or they should have the brave heart to... to express their opinions in front of the others, and they should...ah,...yes.

Take 2

I don't think the introverts should improve their extraversion in order to be successful in business because they are thought ideas come to mind because of introverts. And by combining the opinions of the introverts and the extraverts, we can **fulfill the demands of various people**, and I think it will **lead to the solutions of diversity issues**, so I think the introverts... ah... introverts' characteristics sometimes help the... sometimes **contribute to the company's benefit or diversities of the company or the society**, so I think introverts should more cherish their characteristic and they don't have to... they don't have to feel superior...inferior than the extraverts.

(ウ) 方策「関連英文の挿入」の検証

分析した発話は、事後の質問紙調査で「英文の内容理解を基に自分の意見を発表することができた。」かつ「関連英文を読むことが自分の意見を話すことに役立った。」と自由記述欄で回答した生徒の発話である。

全体的に流ちょうさが向上し、使用語句の幅が広がったことに比例して内容も深まった。例えば、思考面において、Take 1 ではスピーキングスキルや意見を言えることの重要性を述べるに留まっていたものが、関連英文を通して、Take 2 では多様性が会社や社会にもたらす利点等にも言及した上で、より広い視点から自分の考えをサポートするようになったと言える。このように、本文内容をある程度読み取り、即興で英語を話すことに慣れている生徒たちにとって、「関連英文の挿入」は、より広い視野をもった深い意見を引き出し、論理的に話すために有効であったと考えられる。



### 3 ICT機器の利活用：主体的に学ぶ機会の提供、パフォーマンス評価への可能性の検証

ここでは主に Post テストで行った質問紙上での項目「この単元（一連）の授業を通して、外国語の学習についての意識や気持ちの変化、学習方法に対する感想など、あなたの考えを教えてください。」に対する生徒の自由記述から分析を進めた。特に、録音に関する生徒の自由記述の中から、主体的に学ぶ機会の提供及びパフォーマンス評価への可能性を考察する。以下は、分類した生徒の自由記述欄での回答である。

- (1) 自己の「話す」能力を認知する（モニタリングやメタ認知等）ための機会としての反応
  - a 「録音することを通して自分の英語を客観的に見ることができた。」
  - b 「自分で録音することも話す練習になることが分かったからこれからも続けていきたい。」
  - c 「授業でやっていた、ペアで自分の意見を言って、それを録音して送る活動が、ペアの相手に言っているときは文法も何もない英語を話していたが、それを録音用に文章を組み直すときにこうすれば正しい文になるのか、と理解を深めることができた。」
- (2) 教科書本文の理解を深める手段としての録音への反応
  - d 「意見を述べたり録音したりするため、普段より内容や英語に対する理解を深められた。」
  - e 「録音は自分の意見や考えについて熟考したり、本文の内容を振り返るのに良かったと思います。」
- (3) 発表形式としての録音への反応
  - f 「発表よりも録音の方が良かった。」
  - g 「自分で考えて文を作ることによって言いたいことの単語を知ることができた。録音の方が自分のペースでゆっくり話せるので良かった。」
  - h 「学校での録音に抵抗がある。」
  - i 「録音するのは少し恥ずかしいが、以前より文の構造に気を付けるようになった。」

上記の生徒意見 a、bにあるように、ICT機器を利活用した録音活動を通して、生徒が自らの「話す」能力を正しく認知し、振り返ることを促進できたように考えられる。しかし、発表形式としての録音については、生徒意見 f、gにあるように発表という形態よりも録音という形態の方を好む生徒、生徒意見 h、iにあるように録音に対する抵抗感をもつ生徒の双方が見られた。このことは、検証授業前からの英語学習の素地によるものとも考えられる。いずれにせよ ICT機器を利活用した録音活動は、主体的に学ぶ機会の提供には役立ったと言える。また、パフォーマンス評価を行ったことにより、生徒の活動や思考の過程を客観的に記録できたことは、教員の視点からは活用可能性を大いに感じることもできた。一方、生徒からは様々な意見 f、g、h、iが見られたことも考慮し、個別最適なパフォーマンス評価の一選択肢としての活用は、実施方法を学校の実態に合わせた上で推進されるべきであると考えられる。

#### 4 まとめ

本研究では都立高等学校5校において、教員6名がそれぞれの学校の生徒の実態に合わせ、「読むこと」と「話すこと[発表]」の統合的な言語活動を通じた指導を、個別最適な学びと協働的な学びを交えながら行い、それを生徒の情意的側面から評価した。指導の方策については、量的調査により全体的な見通し、質的検証により生徒の実態に合わせた最適な検証ができた。情意的な側面では全ての学校において、元々の苦手意識の有無に左右されず、「自分の意見を英語で話すことができた」という達成感を非常に多くの生徒がもつことができたことが一番の成果であった。また、今回の研究は5領域の力を伸ばすための指導として、統合的な言語活動に有効性がある可能性が十分に示された。

### VII 今後の課題

#### 1 統合的な言語活動の在り方とその実施に向けた教材選定

今回の指導では、「話すこと[発表]」の力の育成を最終目標にしたため、それに適した単元や題材などを見極める必要性が大いに感じられた。「読むこと」の指導についても、複数の領域を統合させた言語活動を意識するのであれば、単元目標に示された、育てたい領域の力に合わせ、指導を段階的・継続的に行うと共に、授業を実際のコミュニケーションの場とすること、生徒の実態に合わせ5領域の力をバランスよく育てるための指導を行うことを念頭にした教材選定が必須である。

#### 2 年間指導計画の重要

本研究において、「話すこと[発表]」に「読むこと」の方策を取り入れたことで、生徒が自身の英語力の伸長を実感することができたことが示された。このことから、全体的な指導の見通しや適切な教材選定が、教員と生徒双方にとって重要であると言える。さらには、そのような指導計画を考える過程で、主体的で対話的な学びを実現する活動や、ICT機器の活用、評価の具体的な方法についても事前に留意しておくことで、生徒にとって個別最適で深い学び、そして実践的な英語力の定着につながるものと考えられる。今回の研究は「話すこと[発表]」の力の育成を最終目標に置いたが、5領域を3観点でバランスよく指導するためには、年間の指導を考える際に、コミュニケーションの目的、場面、状況などを設定した上で、育成すべき資質・能力が身に付くように計画する必要がある。

#### 3 「話すこと[発表]」の力を育てるための方策探究

今回の研究は、生徒自身の達成感という情意面からの検証を中心とした研究であった。そのため、教員の視点では、「話すこと[発表]」に対する生徒が考えた自己評価の基準が「低すぎる」又は「高すぎる」という実態があった。また、具体的な指導方策と客観的な「話す」力との関連性を調査したいという声もあった。その際は外部検定試験の成績の推移などを基に、指導方策と成果の関連性を長期的に、より深く分析し、より良い指導を組織的に模索する必要がある。

# 令和5年度 教育研究員名簿

## 高等学校・外国語

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立青山高等学校	主任教諭	◎亀田洋斉
東京都立青山高等学校	主任教諭	大塚有紗
東京都立日比谷高等学校	主任教諭	○笹生綾子
東京都立小松川高等学校	主任教諭	武田陽三
東京都立拝島高等学校	主任教諭	竹内謙輔
東京都立田無高等学校	主任教諭	近藤京子

◎ 世話人    ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課  
指導主事 田中 佐岐子

令和5年度  
教育研究員研究報告書  
高等学校・外国語

令和6年3月

編 集 東京都教育庁指導部指導企画課  
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
電話番号 (03) 5320-6849